（原稿郵便）　（明治廿一年五月九日第三種郵便物認可）

臺灣日日新報

本日八頁　内地向定價一ヶ月金四十錢　臺北市北門町一丁目一番地　臺灣日日新報社　電話十一番　臺灣向定價一ヶ月金五十錢　振替口座臺北一二四番　廣告料一行一回金十五錢　一行一週金八十錢　一行一月金二圓　特別記事ハ別ニ定ム

ダンダンは
風の妙藥

發賣元　北區信生堂藥房
代理　東京小石川區音羽町大通
大木合名會社
大阪東區淡路町二丁目
同支店
各藥店に販賣す

ハゲと
頭痛に
一番効く
のんでできく
脳の働きを助け脳の
老いを若返らせ
脳經痛、
ロイマチスに
驚異の良藥なり
試みよ　五十日分
一圓　送料十錢
本舗　臺北市表町一丁目
臺灣藥品株式會社

大正三年創業
大正十年改組
臺灣藥品株式會社
門司　神戸　大阪
東京　名古屋
臺北　新店出張所

大正三年創業
大正十年改組
臺灣藥品株式會社
門司　神戸　大阪
東京　名古屋
臺北　新店出張所

大正三年創業
大正十年改組
臺灣藥品株式會社
門司　神戸　大阪
東京　名古屋
臺北　新店出張所

大正三年創業
大正十年改組
臺灣藥品株式會社
門司　神戸　大阪
東京　名古屋
臺北　新店出張所

大正三年創業
大正十年改組
臺灣藥品株式會社
門司　神戸　大阪
東京　名古屋
臺北　新店出張所

大正三年創業
大正十年改組
臺灣藥品株式會社
門司　神戸　大阪
東京　名古屋
臺北　新店出張所

大正三年創業
大正十年改組
臺灣藥品株式會社
門司　神戸　大阪
東京　名古屋
臺北　新店出張所

大正三年創業
大正十年改組
臺灣藥品株式會社
門司　神戸　大阪
東京　名古屋
臺北　新店出張所

大正三年創業
大正十年改組
臺灣藥品株式會社
門司　神戸　大阪
東京　名古屋
臺北　新店出張所

大正三年創業
大正十年改組
臺灣藥品株式會社
門司　神戸　大阪
東京　名古屋
臺北　新店出張所

學生號

昭和十年入試問題解答號

昭和十年入試問題正解號

受驗と學生増刊　定價九十五錢（送料）

昭和十年入學試験
上級英語増刊　定價五十錢（送料）
英語問題研究號

昭和十年入學試験
上級數學増刊　定價五十錢（送料）
數學問題研究號

昭和十年入學試験
上級數學増刊　定價五十錢（送料）
數學問題研究號

禮讃集中・忽ち再版!!

特輯　五月

入試解答豫想

- 漢文を解く鍵　岡井慎吾
- 昭和十年度の入學競爭率（一）
- 出題越旨と出典
- 採點に苦んだわけ　廣橋敎授
- 各題の採點法　法邑敎授
- 基礎を强固にせよ　藍井敎授
- 文法書熟讀の事　木村敎授
- 出題方針は流線型　上石敎授

實際答案の批判

- 先づ文法的知識　清野敎授
- 一番の失點は千里の差　橋本敎授
- 勞して益少き答案　中村敎授
- 年々歳々過誤相同　蒲池敎授
- 依頼心が無さ過ぎる　上田敎授
- 不良答案の共通的缺陷　堀江講師
- 題意把捉を正確に　田淵敎授
- 第三問を中心として　馬場敎授
- 際立つ答案の吟味　大石敎授
- 大學圖書館の獲得點　山崎敎授
- 數概念を會得すべし　高瀬敎授
- 英作文の不成績　古瀬敎授

解答の誤謬指摘

- 先づ文法的知識　清野敎授
- 一番の失點は千里の差　橋本敎授
- 勞して益少き答案　中村敎授
- 年々歳々過誤相同　蒲池敎授
- 依頼心が無さ過ぎる　上田敎授
- 不良答案の共通的缺陷　堀江講師
- 題意把捉を正確に　田淵敎授
- 第三問を中心として　馬場敎授
- 際立つ答案の吟味　大石敎授
- 大學圖書館の獲得點　山崎敎授
- 數概念を會得すべし　高瀬敎授
- 英作文の不成績　古瀬敎授

- 惡い癖　荒木敎授
- 國文法の場合　渡邊敎授
- 正確なる初歩と應用力　三浦敎授
- 寸隙を惜め　多田敎授
- 英文解釋の要點　松村敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　米本敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　鳥井敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　成田敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　前川敎授
- 英文解釋の要點　松村敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　米本敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　鳥井敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　成田敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　前川敎授

- 惡い癖　荒木敎授
- 國文法の場合　渡邊敎授
- 正確なる初歩と應用力　三浦敎授
- 寸隙を惜め　多田敎授
- 英文解釋の要點　松村敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　米本敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　鳥井敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　成田敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　前川敎授

- 惡い癖　荒木敎授
- 國文法の場合　渡邊敎授
- 正確なる初歩と應用力　三浦敎授
- 寸隙を惜め　多田敎授
- 英文解釋の要點　松村敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　米本敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　鳥井敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　成田敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　前川敎授

- 惡い癖　荒木敎授
- 國文法の場合　渡邊敎授
- 正確なる初歩と應用力　三浦敎授
- 寸隙を惜め　多田敎授
- 英文解釋の要點　松村敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　米本敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　鳥井敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　成田敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　前川敎授

解答の誤謬指摘

- 惡い癖　荒木敎授
- 國文法の場合　渡邊敎授
- 正確なる初歩と應用力　三浦敎授
- 寸隙を惜め　多田敎授
- 英文解釋の要點　松村敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　米本敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　鳥井敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　成田敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　前川敎授

- 惡い癖　荒木敎授
- 國文法の場合　渡邊敎授
- 正確なる初歩と應用力　三浦敎授
- 寸隙を惜め　多田敎授
- 英文解釋の要點　松村敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　米本敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　鳥井敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　成田敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　前川敎授

- 惡い癖　荒木敎授
- 國文法の場合　渡邊敎授
- 正確なる初歩と應用力　三浦敎授
- 寸隙を惜め　多田敎授
- 英文解釋の要點　松村敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　米本敎授
- 英文解釋法十二箇月讀破（五）　鳥井敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　成田敎授
- 讀破者合格記念名摸（七）　前川敎授

定價四拾五錢　送料二錢
東京麹町區有樂町一丁目一
研究社
振替東京二八六〇二
（04—65）

第一號

獎學大懸賞發表

第一號には獨學獎勵のための獎學大懸賞の問題が發表されてゐる。君もスグ之に應募して學資免除の特典を得られよ。

豫科生の講義

早稻田大學出版部

東京・牛込

無代進呈　本見谷内

左記各講義も新學期初旬より一ヶ年間　一回・前後期各一ヶ年

商業講義	女學講義
文學講義	法律講義
政治經濟講義	建築講義
電氣工學講義	豫備講義

見本請求には必ず記名を忘れぬこと

日本隨一の
權威ある技術者は多年ボッシュ製品を採用し來り優秀にして經濟的なる利益を享受せられた。
然して現在ボッシュの模造品はボッシュ製品と同等の利益を與へつゝあり乎？
「優秀なる機關は常に優秀なる電氣裝置と共に在り」
優秀なる電氣裝置即ボッシュ製品の御愛用を乞ふ。

日本隨代理店　イリス商會
一手販賣店　柳生商店

營業所　東京市赤坂區溜池町一五
イリス商會ボッシュ部

ボッシュ・サービス・ステーション
東京　神戸　名古屋
福岡　靜岡　京城
北大連　奉天

新學年大特價　五十錢又は二圓安く買へます

文學博士市河三喜・飯島廣三郎・幷柳都太郎共著
房山富
大英和辭典
￥5.50
定價七圓五十錢　送料內地.57

文學博士服部宇之吉・文學博士小柳司氣太共著
縮刷詳解漢和大字典
￥1.80
定價二圓三十錢　送料十三錢

業暗しい夏行人氣!!　小學讀本でも中等教科書でも新聞雜誌でもわからぬ言葉は何でも敎へてくれる敎育界推奬のスマートな美しい辭書。

大英和は中學上級から大學生に!!
小學生・中學生・女學生は縮刷詳解漢和を!!

東京・神田
振替東京五〇一〇番
房山富

強力男性ホルモン
生殖腺ホルモン
アンドロスチン

新鮮なる動物の雄性生殖腺より其水溶性及脂肪可溶性の全有効成分を完全に抽出し生物學的檢定の下に効力を一定せる進歩せる男性ホルモン劑にして左記疾患に著効あり

- 精力減退・體力減退・精神力衰弱・催淫感
- 生殖器衰弱・早老症・性的神經疾患等

定價【試驗十錢入（三〇〇）】【徳用二百五十錢入（二〇〇）】

日本總代理店　日東貿易株式會社
代理店　東京小西新右衛門商店
販賣元　大阪市東區瓦町三和ヒルモン研究會社
ヒルモン化學工業會社日本學術部より郵呈

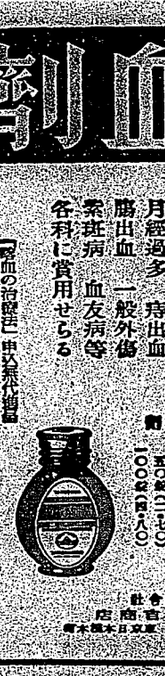
青春の源泉・活動の要素

止血劑

ロクヒゲン

喀血　血痰　鼻血
月經過多　痔出血
腸出血　一般外傷
紫斑病　血友病等
各科に賞用せらる

「吹血の治療法」申込次第贈呈

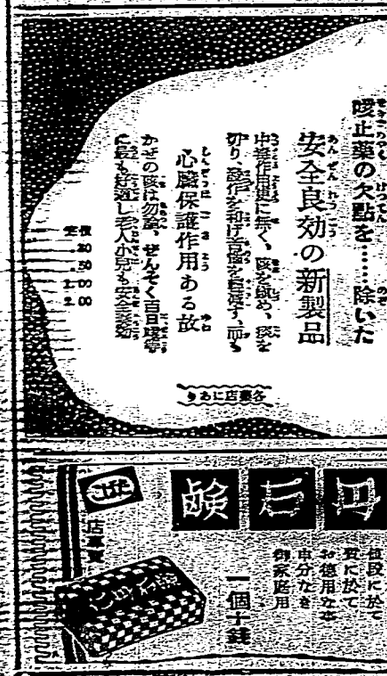


吹き止め
ぜんそくに
唐澤醫學博士推奬
ベルマン

咳止藥の欠點を……除いた
安全良効の新製品

出產作用に無く、咳を鎭め、痰を切り、發作を和げ呼吸を容易ならしむ。
心臟保護作用ある故
かぜの咳は勿論、ぜんそく百日咳、肺炎も速かに老人小兒も安全服用

有效に店頭に



顏に出來る
にきび
吹出物
面皰
雀斑
日燒
顏の黑ずみ
一個十錢

血に於て
血液に於て
腎に於て
お徳用なる
御家庭用

英、佛、伊二國代表の歷史的大會議閉幕

歐洲平和の礎を定て

平和確保に共同政策を申合す

五月、ダニューブ諸國會議を招集

英、佛、伊二國の意見一致

不侵略條約の起草を要求

ドイツに提示すべき

對支政策確立の全支總領事會議

各地の排日情況を報告後

今後の對支方針を協議

州下に率先して海山自治協會生る

きのふ盛大な發會式

今後も存續して完全自治に邁進

臺灣地方自治聯盟今後の

活動方針決定

存續の可否を白熱的議論か

自聯全島理事會

內政部長に黃邨氏就任

殷同氏語る

歐洲の危局切抜に英、會議見事成功

共同宣言に二國調印

確平不拔の國體觀念を訓示

南軍司令官　關東軍に對し

齋藤、山本兩氏を大黑柱に据ゑる

政黨からは六名を採る

長老閣僚の一致意見

內閣審議會

北島局長來臺の用務

株式募集廣告

日本新聞協會大會

宣傳大賣出し

特約販賣店（順不同）

東京名產淺草海苔

地衣治及古衣治地

梅花飯

大好評人氣全島を風靡せる……

第二回全柄又々荷揃

全島の特約店にて是非お買求下さい

親鸞聖人（180）

吉川英治作　山村耕花畫

女人篇

雲母月夜（三）

佐房さや明が、その夜も更けるまで血まなこになつて探してゐるのに、どうしても師の牛車も見あたらなければ、院へも參つて見えなかつたのは、次のやうな思ひがけない事故と事情が、範綱の邸宅をのせて聖光院へ急つてくる牛車であつた。

川をへだてゝゐるものの火ときへいへば、六波羅のまへは、四門に兵を備へ、出入や往來へきびしい眼を射付けてゐる。

大勢の驚笑が起つて、そろそろと出てきた貧相な人影が、偽せ役人の仮をとり巻いてその周圍の牛車の止まつた處へ來ると、範宴考にしては世にも珍しい程の大聲で、

「待てつ」

と、よゐに闇から檜をだした。

供をして來た郎黨は透かさず、

「怪しい者ではござらぬ、これは關白殿のお身内十四歳實秀が家の子にござるが、ことひ吉野殿門のために、聖光院よりお迎へ申した御門跡樹寂少僧都の君が、ただ今、主人のいひつけにてお參りこうす途中にござる」

と云つた。

「樹寂少僧都か」

「さればこそ」

「明白ならば、なぜ最初にさう申さぬ」

「御見れば――」

「つかつかと牛車のそばへ寄つて來て、ぶつつけに簾の内をのぞき見てから、

「さうらしい通れ」

と許した。

「御免して、まつすぐに急がうとすると、又、呼びとめて、

「あいや、から行かれい」

と、百方阻止した。

それでは埒あかぬとなると、

「無礼」

と、一方の大將は、

「しらべ立てするにも及ばぬ、院の御使者と申すに、何の疑ひがあらう、通せ通せ」

と、しかし眼を射付けてゐる。

若くも、そこを押し通つて、西洞院の辻まで來ると、範宴考にしては世にも珍しい程の大聲で、

「待てつ」

と、よゐに闇から檜をだした。

供をして來た郎黨は透かさず、

「怪しい者ではござらぬ、これは關白殿のお身内十四歳實秀が家の子にござるが、ことひ吉野殿門のために、聖光院よりお迎へ申した御門跡樹寂少僧都の君が、ただ今、主人のいひつけにてお參りこうす途中にござる」

と云つた。

「樹寂少僧都か」

「さればこそ」

「明白ならば、なぜ最初にさう申さぬ」

「御見れば――」

「つかつかと牛車のそばへ寄つて來て、ぶつつけに簾の内をのぞき見てから、

「さうらしい通れ」

と許した。

「御免して、まつすぐに急がうとすると、又、呼びとめて、

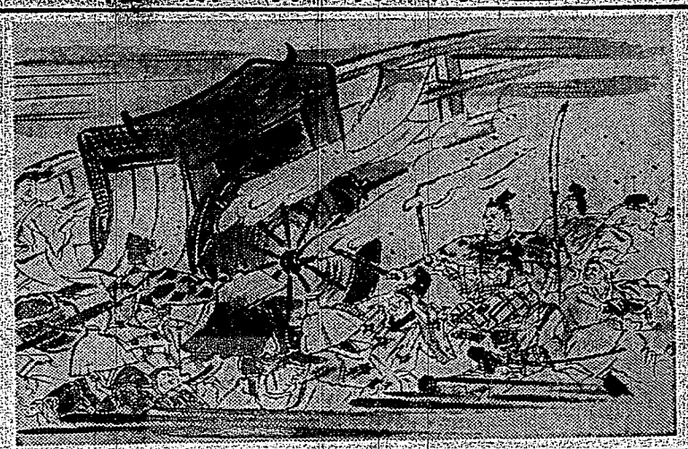
「あいや、から行かれい」

と、百方阻止した。

それでは埒あかぬとなると、

「無礼」

と、一方の大將は、



銀暴騰に拘らず 上海爲替市場安定

銀輸出見合せの懇請を 日本側銀行及外銀が應諾

昭和六年度に百五十甲両九年度には一躍して三百五十甲に達する銀塊を見たが街の雑面取六千五十俵

【上海十四日發本社特電】上海爲替出場はアメリカ銀買上價引上げにより俄相場が二日間に亘つて暴騰を續けたにも拘らず衆想された銀の低落も殆ど小幅の伊動を續ぬるのみで比較的平靜待ちであるが有は國民政府が從來の平衡制度に依る銀價引揚策を行つた爲めである爲め暴騰は其の成行を少からず注目されてゐる、即ち國民政府は平衡制度の無力なる暴りに見切りを付けて十二日より銀引上げ行はず銀高に進捗する方針に決した模様で新銀政策の具體化する迄取敢ず中央銀行は十二日以外の諸銀行に對して銀塊出現合を一切禁止せしめた日本側銀行を始め外銀行も右制限に應ずる態度を取つてゐるので市場は比較的に安定してゐるもこの爲めであるとされてゐる、即ち國府は平衡制度に依る銀價引揚策を行つた爲めである爲め暴騰は其の成行を少からず注目されてゐる、即ち國府は平衡

米價の動搖と 政府米の賣却說

今はその時期でないと 農林省は否認

【東京十四日發本社特電】昨年産米の未會有の凶作に伴ひ本年度の米穀需給は可成りの供給不足が豫想されてゐたので政府米の大量賣却が問題となり過般來各方面に種々な憶說が起りこれが爲め現米は繭絹を續け十二日には中國二十九圓と先物二十九圓と午初來の新安値を出現したが右政府米拂下げ說に對し農林省は次の如き意向を漏らしてゐる

即ち政府米拂下げ說は爲めにせんとする宣傳であつて供給不足の實體を認めざる今日大量の整理賣却を行ふ意思は全く有してゐない、殊に昨今の如く米價が騰揚してゐる際に拂下げを行ふ事は避けねばならぬ

右の如く農林當局の意向によれば近い二、三ヶ月中に政府米の大量拂下げは全く期待しがたいが、二月以後に於て實却が行はれるとしても農林省は其の方法、時期、數量に付ては特に愼重な態度を取る方針であるから實却の時期は米價の高騰時を狙ふものと見らる

倫敦糖況一服

【ロンドン十三日發本社特電】今週のロンドン砂糖市場では九六度物五月渡しニハンドレッドウエイト當り五志〇片四二志一五十銭現貨もあと五志一度となつた白糖の需要が閑散となつた事は精糖業者の手控が一巡して實分圓足させ

臺北商工會

總督長官招待

臺北商工會は十日午後六時半鐵道ホテルで晩餐を開き中川總督を始め關係官側十數名の地方創設改正

糖蜜の朝鮮移出

本期は増加

砂糖の副産物たる糖蜜は即ち一ケ年産額に前期は砂糖の歩留特に良好であつた爲めに糖蜜の產出歩合少く從つて產額を減じ而も甘蔗自分消費と產額の增加を待たず品缺之を見るに至つたが今期は砂糖大增產に連れ糖蜜の產額激增し而も甘蔗自分リコニスの歩合多く從つて糖蜜の產額は見込以上に增加する模様で之が爲め之を原料とする酒精の產額も增加すべく又糖蜜の島內消費と差引しても可なりの過剩を生ずる模様であるから總督當局者に於ては之が爲め之を原料として酒精業者に對する補助の方面へ振向ける爲め目下二百十五萬圓計上中の酒精業補助費中より一百萬圓を減額し殘額百十五萬圓を以て

銀塊更に奔騰

水曜會創始以來の高値

【東京十三日發本社特電】十三日入電の海外銀塊相場は米政府が近く再度引上げを行ふべしとの觀測から更に奮騰を示したので內地九圓程度まで昂騰すれば當然一躍七十

臺灣地租規則の改正に就いて

平塚總務長官談

地租は臺稅收であるが當事の實情は時勢の推移に伴ひ漸次不穩當となる事を免れないので內地地租改正に於ては十年目毎に之が改訂を爲す事になつて居る、而して臺灣に於ては總督府地の事情及び收穫は大正四年新設以來二十年、田、畑、養魚池の事情及び收穫は大正八年改正以後十年を經に經過し其の他土地の事情に變動を來せるもの多きに鑑み今回之が改訂を爲すに當つては時勢の推移に伴ひ漸次不穩當となる事を免れないので內地地租改正に於ては十年目毎に之が改訂を爲す事になつて居る、而して臺灣に於ては總督府地の事情及び收穫は大正四年新設以來二十年、田、畑、養魚池の事情及び收穫は大正八年改正以後十年を經に經過し其の他土地の事情に變動を來せるもの多きに鑑み今回之が改訂を爲すに當つては

小作地總面積の 六二%は書式契約

紛爭調停も好成績

主要商品落付き 株式漸く下値寂し

日石波亂日産帝人下る

中堀綠肥競作會

基隆の金融

預金減貸出增

【基隆電話】基隆組合銀行にては二月中の預金貸出並に重要商品別貸出高左の如し（單位千圓）

△預金

	受入殘高	增減
當座	一、六二〇	一、八六八
特別當座	二、〇九九	二、一九九
定期	一、二四一	一、二四一
其他	五、九九	五、九九
合計	五、四三四	五、四三四
前月合計	四、九四〇	四、九四〇

△貸出

	貸出高	增減
手形貸付	一、四八一	一、四八一
證書貸付	二、六二	二、六二
當座貸越	三、三五	三、三五
荷爲手形及買入爲替	一、二六	一、二六
合計	六、三六	六、三六
前月合計	六、八八八	六、八八八

小作地總面積の六二%は書式契約

紛爭調停も好成績

殖產局農務課調査によれば九年十二月末日現在に於ける臺內に於ける小作紛爭調停成績及び小作契約締結狀況は左の如くである

一、調停關係

	小作地	契約	同上
區別	總面積	面積	%比
臺北州	三、六三一甲	二、三三甲	六三%
新竹州	二、八三	一、六八	五九
臺中州	八、七四	五、七二	六五
臺南州	一〇、六四	六、四四	六〇
高雄州	四、三一	二、六二	六二
計	三〇、三六二	一八、五四	六一

即ち全島四十五甲の小作地面積の內うち二十五萬三千甲餘は既に小作改善關係の感化によつて書式契約を締結してゐる、其割合は六二%の契約解除に因るもの小作料の減額に基くもの等の順序である

二、紛爭調停

	成立	不成立及未決	合計
臺北	三五	一	三六
新竹	一、六六	一	一、六七
臺中	一、〇六	一	一、〇七
臺南	三	一	四
高雄	四	一	五
合計	一、三四	五	一、三九

即ち紛爭件數四千九百七十一件のうち調停成立せるもの四千七百三十六件で、不成立及び未決は僅か二百三十五件に過ぎない、紛爭の原因別に見るとき小作料の減納に關するもの最も多く、次は地主變更に因るもの小作料の一時的減額に基くもの等の順序である

一問一答

淋疾と其の治療

專門醫家と二般臨床家とが必讀すべき好個の參考資料

U.334

問、淋疾は患者の不攝生にもよるが、多くの場合、治療期間は、短かきも數ケ月、長きは數年にわたりその苦痛は肉體的に、精神的に物質的に、甚だ大である。その根滅策如何？

答、すべての疾病が、其の根源を治療すべきであると同樣に、淋疾も男子にありては、尿道內の淋菌を速かに死滅せしむる事が治療期間を短縮する根本條件であると思よ。

問、それは勿論であるが、尿道粘膜細胞組織下を侵食しつゝある淋菌は、從來の內服藥、洗滌、注入、注射藥等にては容易に死滅しない、さりとてブヂー挿入其他、機械的療法は專門醫すら使用に修練を要し、一般臨床家としては使用に困難であり危險がある。こゝに問題を生ずるのであるが、この解決策ありや、

答、一般臨床家が尿道內の淋菌を根治するために用ふるものは、其の効力の適確なる事、使用法の簡單安全なる事が根本條件である、しかるに從來の藥品、及び療法にては貴問の如くこれに該當するものが無いのは遺憾である。

問、其の理由は？

答、たとへば用法簡單の內服藥は、尿道を促がし、尿道內の粘膜表面を二時的には滑澁するが粘膜側面を侵食しつゝある淋菌は、之にては容易に死滅しない。また洗滌、注入等は水溶液のため尿道彈力によつて、直ちに外部へ流出し、尿道內殺菌時間は僅かに數分に過ぎない、故に之等を以て充分深く侵食しつゝある淋菌を根治するには、極めて長日月を要するのが理の當然である。其他の各種インチキ療法に對しては言及する必要を認めない。

問、淋菌に對し最も殺菌力強大なるものは何か。

答、銀劑である。從つて淋疾の藥品には銀を主劑とするものが多い。しかし單なる銀劑では粘膜深透性が微弱であつて、細胞組織下の淋菌にまで殺菌作用を及ぼす事は、甚だ至難である。

問、しからば其の銀劑を深透せしむる方法ありや、

答、「銀に色素を化合すべし」とは最新の定說である。

問、では銀と、色素を化合し、之を水溶液として尿道內へ注入塗布すれば理想的であるか。

答、銀と色素の化合に成功すれば、右の方法にても從來の注入劑に比し、其の殺菌効力は數倍する。しかし水溶液では直ちに外部へ流出するので、充分ではない。

問、とは云へ、それ以上の方法があるか、銀と色素の化合物を粉末とし、之を尿道に挿入すれば、その粉末は尿道彈力のために、却つて尿道粘膜の皺壁にまで平等に分布沈着する。そして分布沈着した粉末は、其まゝ尿道內の分泌液によつて、徐々に溶解、浸潤じつゝ、銀の殺菌作用と色素の粘膜深透性と兩々相俟つて、次の放尿時まで數時間にわたり尿道內に於て殺菌作用を發揮し、其の効力を粘膜側面及び病巢深部にまで深達させる方法がある。

問、成る程、良い方法である。しかし其の粉末を尿道內に完全に挿入するのは困難ではないか、

答、勿論、粉末其のまゝにては尿道內へ挿入する事は到底不可能である。その方法として、直ちに溶解する所の管を作り、其の管中に粉末を入れ、之を尿道へ挿入すれば極めて容易の事である。

問、其の管を尿道へ挿入する方法は？

答、クリーム性の液（リスリンにても差支へなし）を先づ尿道內へ入れ、次きに、その管にもクリームをつけ、尿道內へ挿入すれば愈々容易にて何等の不安も手數もなく、前後の處置時間は一回僅か二、三分にて出來る。

問、貴說の如く銀と色素を化合し、之を粉末として、尿道內へ挿入して數時間、殺菌作用を持續する事ができ、しかも用法が簡單安全にて專門醫ならずとも使用ができるとすれば、實に嬉しくべきものにてたゞ〳〵感嘆の外ないが、しかしたゞら、之は單に理想にとゞまり、實現不可能の事ではないか。

答、最近、淋疾治療界に非常なる勢にて名聲を高めつゝある「ウラルゴール」（日、英、米、佛、製法專賣特許。友田發賣）とは、この理想を如實に具體化したものであつて、このウラルゴールが創製されたる事は專門醫及び患者に對して大福音と稱すべきである。

ウラルゴールは一問一答に示せる如く、銀と色素との化合と稱する特殊の方法により化合し、之を粉末とし、直ちに溶解する所の管中に收めたものである、從て之を尿道に挿入すれば、外管はすぐ溶解して其の粉末は尿道內にて徐々に溶解浸潤しつゝ數時間にわたり殺菌作用を營み、粘膜細胞組織下の淋菌にまで殺菌力を浸透す、使用法は簡單にして安全、無刺戟にて副作用なく、携帶にも極る便利である、且つ內容が粉末なれば、洗滌、注入等の如く淋菌其他の汚物を後部へ移送する危險がない

ウラルゴールは次の適應症に從ふが最も効果適切にて安全なり。

一、豫防用としては（其の翌日にても可）
　　一回一本を挿入し置くべし。
一、慢性及び再發には
　　最初に短管、次きに中管
一、慢年にわたる慢性症には
　　短管、中管の次きに長管

治療に要する本數＝一日一本或は二本使用になる時間＝一本僅か二、三分
發病後何時間＝發病後何時間より三時間以內

附記

ウラルゴールの効力に就て、若しいさゝかにても疑念を抱くならば、先づ一回試驗として一本を求めに使用して頂きたい、さすれば其効力を充分認識するであらう。

ウラルゴールの種類と價格

短管三本入（豫防用、初發用、今回用）	一回分	〇円七五
同　十本入（男子一般性及び婦人用）	一回分	二円〇〇
中管十本入（男子慢性及再發用）	一回分	二円五〇
長管十本入（男子慢性及再發用）	一回分	三円〇〇

製劑名稱上の注意　ウラルゴールの名稱は必ず左記の如く記入せられたし。
各種の類似品あり、ウラルゴールの効果、又は安全性を保證する爲め、特に左記の如き名稱を附す、デパート、藥店にあり若し品切れの時は直接發賣元へ御注文あるか代金引換郵便振替貯金の方法にて發送す。
（郵便振替貯金は發賣元にても可）

東京市日本橋區本町三ノ一
發賣元　友田合資會社

臺灣總督府認可
我國五銀業者は一ニューヨーク相場が七十二仙の米政府買上げ値と同程度まで昂騰すれば當然一躍七十九圓位からみまで上進するものと豫想してゐるが米政府買上値再度引上げ發行されればこゝしばらく大井知らずの勢ひをたどるだらうと豫想してゐる、尚十四日の東京市中相場も銀塊一躍二十九錢五厘買二十六錢五厘を示した

堂島雜觀

【大阪十三日發】恒例春から夏場へ向つて商況も漸次活氣を呈し來つたが、今回の反騰は從來の傾向にあつたが如き買人筋の買進出によるものでなく、殆んど全部が賣人筋の買戻しによるもので、從つて買人筋の買進出は未だ見るに至らず、從つて商況は從來の如く活氣を呈するに至らず、從つて商況は從來の如く活氣を呈するに至らず、從つて商況は從來の如く活氣を呈する

じーべ◎がんま

村野幸一（編）

▲或る觀測所の裏口

「あなた銀ブラ一杯を待つて來てよ」
「ううん、誰も見てゐないだらうなア」

▲倒れかかつた家

家主「あれを、眞直に立つておけば借手もつくやうだつて」

▲纏足もこうすればいゝですね（アンソク）

▲見當違ひのお客

忍者「ヘヘーン、コロシミアゲル「ウセモノ」エンメン、アラアンマ「ワタシ、スミマセンガル、コレヤツ「ホントウアルナイニセボカポンミクラサイ

コールドコーヒー
▲冷き戀

▲虎と豚

虎の欲しい動物園長「虎は幾らでもこれは檻に入れられんわい」
監督「こんな所で寢てゐると豚箱へ入れるぞ」「？」

▲ストライキ

先頭までは開襟香り流行でしたがこれからは？　西ただし

「オーイ これぢや 俺達の要求を入れねくうやいやだよー」

▲見當違ひのお客

忍者「ヘヘーン、コロシミアゲル「ウセモノ」エンメン、アラアンマ「ワタシ、スミマセンガル、コレヤツ「ホントウアルナイニセボカポンミクラサイ

▲或る觀測所の裏口

「あなた銀ブラ一杯を待つて來てよ」
「ううん、誰も見てゐないだらうなア」

▲倒れかかつた家

家主「あれを、眞直に立つておけば借手もつくやうだつて」

▲纏足もこうすればいゝですね（アンソク）

▲虎と豚

虎の欲しい動物園長「虎は幾らでもこれは檻に入れられんわい」
監督「こんな所で寢てゐると豚箱へ入れるぞ」「？」

▲ストライキ

先頭までは開襟香り流行でしたがこれからは？　西ただし

「オーイ これぢや 俺達の要求を入れねくうやいやだよー」

Tea Room

A　奥多摩は喫茶店の紅子に惚をよせてゐました で毎日コーヒーばかり飲みに來てゐたデス

B　昨日もホットコーヒー 今日もホットコーヒー 勿論明日もホットコーヒーがたうとう勘き惡になつたデス

C　或日奥多摩は紅子に…… 「僕は今日は君の惡を呑みに來たんだ君がもし僕かすきなら寢て惡を持つて來てくれ

D　すると紅子は 「茶つかりしてんのね そんなコーヒーきざだわ私嫌然あんた旅ひとで仮の愛う夢も泡き惡になつてしまつたデス」

心の散歩

（34）

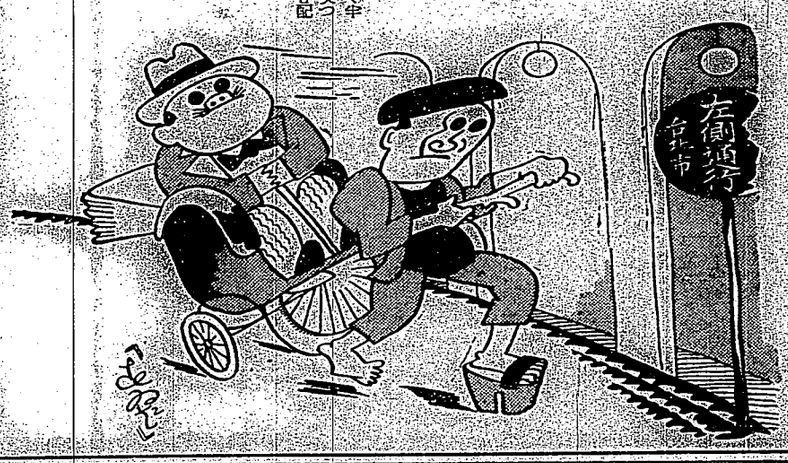
盛夏の巻

岡島　水馬

例へ半月で一洋服の一點張りでは日本人は實際的で開口して終ふ、門へ來て帝の失せた惡を歐め發表一枚引掛けた時の愉快な心持やたら言外の愛嬌であつた、ヤウ盛してゐる心持やだ

内地人のサラリーマンは宛とアパート式個室で生活、ボーイが掃除をしてくれコックが食事を調理し洗濯屋が汚物を引受けて行く有樣マダムといふ實況を見てハハンと大連〇〇事件を連想した、旅館たる設備も日發と俱に一陣の颶風と化しラヂオに蓄音器、一夜をガチャ〳〵させて一日の勞を慰やしてゐるのだ、他に安全な何にものもない結構がダンスに軍歌、陸軍といふ派遣部隊の聲を伸ばしてゐる

門に七ヶ年といふ年がある日く當大な代價だの安家、老婆人形の家具、二年の稽古、最新流行の服も眼光には一瞥でそれと分るのだから仕方ありません。それは晝かにシャイニイ・メイクアップ、即ち光るお化粧からです。但し最新ならないで下さい、いくら光るお化粧といつても僕の白晝の光るのとは全く違つた光りですから——つまりすこし光つた光なのです。何とも云へぬ美しい輝きなのです。言葉を換へて申せば生れ出でたる美しさなのです。言葉を換へて申せば生れ出でたる美しさなのです。言葉を換へて申せば生れ出でたる美しさなのです。



あゝリズミカワ　ナむ惱は禿若　ケフ　もけ抜

論より證據！

先づお試しを……

この「ワカミツ」は井上猛夫博士及掛札功藥學士が苦心研究の結果創製した、純科學的の毛髮料で……

フケ、發毛等の毛髮の惱みを快適に除き、毛根部の營養を良好にすると同時に、毛根に活潑らしい活力と榮養とを與へ毛髮の發育を旺盛にする、從來の養毛料に知られなかつた優秀の性能を有つて居ります。

而もその快適な使用感と芳香、積極的毛髮の美化作用は當樣日常の整髮用としても手離せぬ品です。

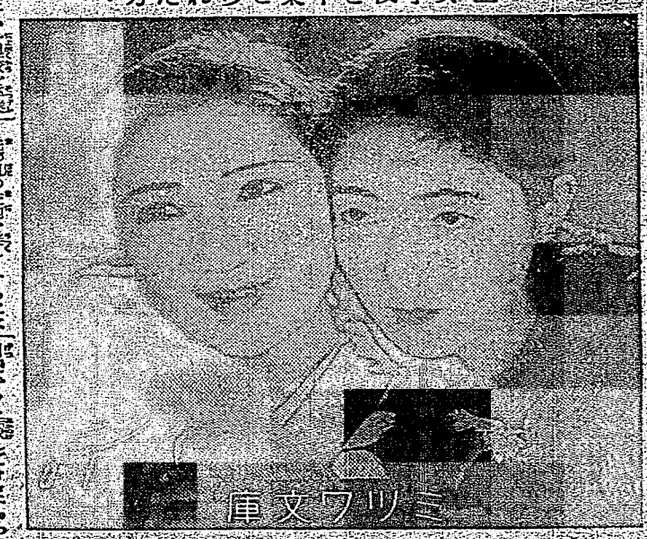
全國有名藥店にあり

（定）一圓五十錢（特製品）
一圓七十錢（優良品）

發賣元　大日本製藥株式會社　東京市芝區三田綱町

春は哀し・春は樂し

へ々方たれらせ業卒を校學女図



先づ眉の生際を美しくするにはお風呂でよく洗ふ事です。誠に平凡なお話ですが、然し此點は何處迄も注意したいと思ひます。番日本人の肌に合ふパック石鹸なら大丈夫、有合せたからつてよい加減な石鹸などは決して使ひに成らぬやう。そして朝に夜の清潔といふ事をお忘れに成らぬやう。

お風呂の後は必ず純植物性の油上等の油脂の微かなサッパのコールドクリームで眉毛をマッサージをなさる事、又外出後などは一ん洗顔が面倒でしたら大體サッパの化粧水などを眉毛の切れに合ませてお眉や瞼を良くのも結構です。不精さへなさらなかつたらニヤドなんか出來なくても濟まうと云ふもの。之等の御注意をすつて居ちつじたら、さて、ものゝ二三ケ月でキット美しくできます。つまりは眉毛に云つて良い石鹸と良いコールドクリームの攻みな用ひ方だけで眉か眉の生際は立派に育かれて參ります。

それから化粧ですが、化粧は最初はサッパのクリームに限かるからと云ひます。所で例のクリームを塗るさうですが、之はさへしたらそのですから、之はありませんクリームはお顏にお成つた脂肪が有りでせう？　それで最つ酒とお思ひでしたら其上にサッパの粉白粉をパフでお磨きに成れば美しいのです。色味は四色い黄れでもお好きなのをお選みに成るのです。從來の二の少量を鼻へ額へ頬へ紛で顏なお化粧が出來ます。新しい化粧料の優良品かからです。

シヤイニイ・メイクアップ

××××オリエ・津坂嬢

なのです。綺麗さうな生地の美なので御座いまう。

あひまり美しくなると彼は私を用してゐるのですから、さぞ私を好きなのですから、美しくお化粧ができる訳なのですから、何だか少し人爲的に過ぎたやうな感じもしますが、それは自然の順序ですから、先づ第一番の生地を美しくするのです。

化粧は異して如何なるものに美せ化粧といふ言葉の有る事の今年の流行的化粧としてシヤイニイ・メイクアップと云ふ言葉をよく耳に致します。所で此シヤイニイ・メイクアップとは一體何ぞや？　光るお化粧とか云ふので御座いまう。何しろアメリカの事ですから相當なものだらうと想像されます。

——ものだらうか想像する許でございます。

——が然しアメリカに於ける此お化粧に關する御研究のお話には一應我日本人には想ひ及ばなかつたと來るやうに思ひますが、皆さん如何でせう？

先づ古いところでは光る露出の雪と云ふのがあります。第一美人の美しさ、それも肌に艶れなる美しさを、よく光るやうに化粧だとか、輝くやうに美しいと云ふやうですし、最新としても最新に美しい人に聞と聞かと二つまゝいと云ふものを感じるのが人情のやうにも思ひますが、如何でせう？　皆さん——斯う御言が終りなのです。最新美の化粧料の二脈化チタニウムを主體にして初めて成功したサッパ白粉です。

天使

(45)

横光利一

田重雄畫

四の廿四

宮

ちっともしかったと思えんですけど、でも、何か、そんな風な汚いことをしましたのなら、御免なさい。」

「もうこのくらい、何と云ったって駄目だ。」と節雄は思った。すると、激しい怒りが、むらむらと込み上って来た。彼は無言のまま、貞子の両肩をぐっと力を入れて摑んだ。しかし、貞子は、靜まり返って動かなかった。

「君には、人間の殘忍さというものの殘さを知んのですか。」

「それは、存てやりますわ。でも、あたし、寺島さんが御健康におなりになったので、もうあたくしの役目も、これですんだと思ひますの。」

「そんなことは、僕にとっては、どうだっていいことです。そんなことが聞いたから、僕はここにおるのやしまへんで。」

節雄は、もう自分が、どうしてこんなに貞子に執着をしたかを、今日あたりに、はっきりと知ろうとは思ってもいなかった。それは、貞子が、あまりに、あっさりと、節雄の前から、姿を消してしまったからであった。

「あなたは、僕に無理なことを思ってるるかもしれないが、よく考へて御覽なさい。春ちゃんにしられるあなたのだから。ようぼう、無茶なんですよ。あなたは、馬鹿者だ。」

と叫ぶと、彼は貞子を突き飛ばした。貞子は、後へ倒れたが、またすぐ起き上って来ると、一層ちっき縋つて來た。

「貞さんは、どうしてそんなに、僕を苛めるのか、不思議なほどにであった。

「君は、今日あたりに、僕が手を出すのを待ってるたのだ。それは、僕はどんなにでも、軽蔑しますからね。もうおしまひだ。僕の云ふことを、聞いてくれたまへ。」

節雄は、昂奮して、貞子の肩を、壁へ押られる限り押しとどめて、暫かに云ったので、貞子は、妙に哀れっぽく、眼へてるた。すると、彼は、急にその自分の眼へた姿が、たまらなく厭になった。

「貞子さん。」

彼は強く云った。

「ねえ、あたくし、そんな御心配にしても、現しことだと思ひますの。」

「あたくしの方が、何もなくなったことなので、どうぞ云ひ争いんですがね。もう少し、僕と一緒にここで暮らしてくれませんか。」

「ねえ、もう、あたくし、そんな御心配にしても、現しことだと思ひますの。」

「あたくしの方が、何もなくなったことなので、どうぞ云ひ争いんですがね。もう少し、僕と一緒にここで暮らしてくれませんか。」

「ねえ、もう、あたくし、そんな御心配にしても、現しことだと思ひますの。」

「これは分ってますが、もうしばらくで、結婚ですからち。」

「あたくしも、あなたに、そんなことを云はせるやうなことは、

貞子は返事をしなかった。

「貞さん。」

「忘れてくれませんか。」

貞子は、答を避けるとも、答えるかの如くに、下を向いて、膝の上に、指つた。

「あのう、明日、あたくし、お暇いただきますわね。」

節雄は、黙って、貞子の顔を眺めてるた。貞子は、いつまでも、眠みつけてるる節雄を見ると、また枕へ顔をつけた。

節雄は、今はただ、あらん限りの苦しみを出して、貞子をかき抱かうと思った。

「貞子さん。」

しかし、彼はもう「言ふことを何を云ひ出すべきか、言葉がなくなって、貞子の肩に手をかけた。

「貞子さん、あなたは、どうして、今日は、怒ってるるんです。」

「それぢや、何そんなことを云んですか。」

と貞子は低く云った。

節雄は、今はただ、あらん限りの苦しみを出して、貞子をかき抱かうと思った。

「貞子さん。」

しかし、彼はもう「言ふことを何を云ひ出すべきか、言葉がなくなって、貞子の肩に手をかけた。

「貞子さん、あなたは、どうして、今日は、怒ってるるんです。」

「愛ってなんか、ゐませんわ。」

と貞子は低く云った。

「それぢや、何そんなことを云んですか。」

節雄は、もう自分が、どうしてこんなに貞子に執着をしたかを、今日あたりに、はっきりと知ろうとは思ってもいなかった。それは、貞子が、あまりに、あっさりと、節雄の前から、姿を消してしまったからであった。

「あなたは、僕に無理なことを思ってるるかもしれないが、よく考へて御覽なさい。春ちゃんにしられるあなたのだから。ようぼう、無茶なんですよ。あなたは、馬鹿者だ。」

と叫ぶと、彼は貞子を突き飛ばした。貞子は、後へ倒れたが、またすぐ起き上って来ると、一層ちっき縋つて來た。

「貞さんは、どうしてそんなに、僕を苛めるのか、不思議なほどにであった。

「君には、人間の殘忍さというものの殘さを知んのですか。」

「それは、存てやりますわ。でも、あたし、寺島さんが御健康におなりになったので、もうあたくしの役目も、これですんだと思ひますの。」

「そんなことは、僕にとっては、どうだっていいことです。そんなことが聞いたから、僕はここにおるのやしまへんで。」

節雄は、もう自分が、どうしてこんなに貞子に執着をしたかを、今日あたりに、はっきりと知ろうとは思ってもいなかった。それは、貞子が、あまりに、あっさりと、節雄の前から、姿を消してしまったからであった。

「あなたは、僕に無理なことを思ってるるかもしれないが、よく考へて御覽なさい。春ちゃんにしられるあなたのだから。ようぼう、無茶なんですよ。あなたは、馬鹿者だ。」

と叫ぶと、彼は貞子を突き飛ばした。貞子は、後へ倒れたが、またすぐ起き上って来ると、一層ちっき縋つて來た。

ラヂオ

午前の部

【六・〇〇】朝の体操（ラヂオ體操）【六・二〇】今日の天氣の豫報と報知【六・三〇】ラヂオ時報【六・三五】ニュース【七・〇〇】國民歌謠（東京）【七・二〇】國民歌謠（東京）【八・〇〇】家庭の時間（東京）【八・二〇】大衆音樂【九・〇〇】家庭科講座（東京）【九・二〇】午前の休憩【一〇・〇〇】家庭科講座（東京）【一〇・二〇】大衆音樂【一一・〇〇】第三高等女學校（京都）【一一・二〇】第三高等女學校（京都）【一一・四〇】第三高等女學校（京都）【一一・五〇】第三高等女學校（京都）【一二・〇〇】第三高等女學校（京都）【一二・二〇】第三高等女學校（京都）【一二・四〇】第三高等女學校（京都）【一二・五〇】第三高等女學校（京都）【一三・〇〇】第三高等女學校（京都）【一三・二〇】第三高等女學校（京都）【一三・四〇】第三高等女學校（京都）【一三・五〇】第三高等女學校（京都）【一四・〇〇】第三高等女學校（京都）【一四・二〇】第三高等女學校（京都）【一四・四〇】第三高等女學校（京都）【一四・五〇】第三高等女學校（京都）【一五・〇〇】第三高等女學校（京都）【一五・二〇】第三高等女學校（京都）【一五・四〇】第三高等女學校（京都）【一五・五〇】第三高等女學校（京都）【一六・〇〇】第三高等女學校（京都）【一六・二〇】第三高等女學校（京都）【一六・四〇】第三高等女學校（京都）【一六・五〇】第三高等女學校（京都）【一七・〇〇】第三高等女學校（京都）【一七・二〇】第三高等女學校（京都）【一七・四〇】第三高等女學校（京都）【一七・五〇】第三高等女學校（京都）【一八・〇〇】第三高等女學校（京都）【一八・二〇】第三高等女學校（京都）【一八・四〇】第三高等女學校（京都）【一八・五〇】第三高等女學校（京都）【一九・〇〇】第三高等女學校（京都）【一九・二〇】第三高等女學校（京都）【一九・四〇】第三高等女學校（京都）【一九・五〇】第三高等女學校（京都）【二〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【二〇・二〇】第三高等女學校（京都）【二〇・四〇】第三高等女學校（京都）【二〇・五〇】第三高等女學校（京都）【二一・〇〇】第三高等女學校（京都）【二一・二〇】第三高等女學校（京都）【二一・四〇】第三高等女學校（京都）【二一・五〇】第三高等女學校（京都）【二二・〇〇】第三高等女學校（京都）【二二・二〇】第三高等女學校（京都）【二二・四〇】第三高等女學校（京都）【二二・五〇】第三高等女學校（京都）【二三・〇〇】第三高等女學校（京都）【二三・二〇】第三高等女學校（京都）【二三・四〇】第三高等女學校（京都）【二三・五〇】第三高等女學校（京都）【二四・〇〇】第三高等女學校（京都）【二四・二〇】第三高等女學校（京都）【二四・四〇】第三高等女學校（京都）【二四・五〇】第三高等女學校（京都）【二五・〇〇】第三高等女學校（京都）【二五・二〇】第三高等女學校（京都）【二五・四〇】第三高等女學校（京都）【二五・五〇】第三高等女學校（京都）【二六・〇〇】第三高等女學校（京都）【二六・二〇】第三高等女學校（京都）【二六・四〇】第三高等女學校（京都）【二六・五〇】第三高等女學校（京都）【二七・〇〇】第三高等女學校（京都）【二七・二〇】第三高等女學校（京都）【二七・四〇】第三高等女學校（京都）【二七・五〇】第三高等女學校（京都）【二八・〇〇】第三高等女學校（京都）【二八・二〇】第三高等女學校（京都）【二八・四〇】第三高等女學校（京都）【二八・五〇】第三高等女學校（京都）【二九・〇〇】第三高等女學校（京都）【二九・二〇】第三高等女學校（京都）【二九・四〇】第三高等女學校（京都）【二九・五〇】第三高等女學校（京都）【三〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【三〇・二〇】第三高等女學校（京都）【三〇・四〇】第三高等女學校（京都）【三〇・五〇】第三高等女學校（京都）【三一・〇〇】第三高等女學校（京都）【三一・二〇】第三高等女學校（京都）【三一・四〇】第三高等女學校（京都）【三一・五〇】第三高等女學校（京都）【三二・〇〇】第三高等女學校（京都）【三二・二〇】第三高等女學校（京都）【三二・四〇】第三高等女學校（京都）【三二・五〇】第三高等女學校（京都）【三三・〇〇】第三高等女學校（京都）【三三・二〇】第三高等女學校（京都）【三三・四〇】第三高等女學校（京都）【三三・五〇】第三高等女學校（京都）【三四・〇〇】第三高等女學校（京都）【三四・二〇】第三高等女學校（京都）【三四・四〇】第三高等女學校（京都）【三四・五〇】第三高等女學校（京都）【三五・〇〇】第三高等女學校（京都）【三五・二〇】第三高等女學校（京都）【三五・四〇】第三高等女學校（京都）【三五・五〇】第三高等女學校（京都）【三六・〇〇】第三高等女學校（京都）【三六・二〇】第三高等女學校（京都）【三六・四〇】第三高等女學校（京都）【三六・五〇】第三高等女學校（京都）【三七・〇〇】第三高等女學校（京都）【三七・二〇】第三高等女學校（京都）【三七・四〇】第三高等女學校（京都）【三七・五〇】第三高等女學校（京都）【三八・〇〇】第三高等女學校（京都）【三八・二〇】第三高等女學校（京都）【三八・四〇】第三高等女學校（京都）【三八・五〇】第三高等女學校（京都）【三九・〇〇】第三高等女學校（京都）【三九・二〇】第三高等女學校（京都）【三九・四〇】第三高等女學校（京都）【三九・五〇】第三高等女學校（京都）【四〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【四〇・二〇】第三高等女學校（京都）【四〇・四〇】第三高等女學校（京都）【四〇・五〇】第三高等女學校（京都）【四一・〇〇】第三高等女學校（京都）【四一・二〇】第三高等女學校（京都）【四一・四〇】第三高等女學校（京都）【四一・五〇】第三高等女學校（京都）【四二・〇〇】第三高等女學校（京都）【四二・二〇】第三高等女學校（京都）【四二・四〇】第三高等女學校（京都）【四二・五〇】第三高等女學校（京都）【四三・〇〇】第三高等女學校（京都）【四三・二〇】第三高等女學校（京都）【四三・四〇】第三高等女學校（京都）【四三・五〇】第三高等女學校（京都）【四四・〇〇】第三高等女學校（京都）【四四・二〇】第三高等女學校（京都）【四四・四〇】第三高等女學校（京都）【四四・五〇】第三高等女學校（京都）【四五・〇〇】第三高等女學校（京都）【四五・二〇】第三高等女學校（京都）【四五・四〇】第三高等女學校（京都）【四五・五〇】第三高等女學校（京都）【四六・〇〇】第三高等女學校（京都）【四六・二〇】第三高等女學校（京都）【四六・四〇】第三高等女學校（京都）【四六・五〇】第三高等女學校（京都）【四七・〇〇】第三高等女學校（京都）【四七・二〇】第三高等女學校（京都）【四七・四〇】第三高等女學校（京都）【四七・五〇】第三高等女學校（京都）【四八・〇〇】第三高等女學校（京都）【四八・二〇】第三高等女學校（京都）【四八・四〇】第三高等女學校（京都）【四八・五〇】第三高等女學校（京都）【四九・〇〇】第三高等女學校（京都）【四九・二〇】第三高等女學校（京都）【四九・四〇】第三高等女學校（京都）【四九・五〇】第三高等女學校（京都）【五〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【五〇・二〇】第三高等女學校（京都）【五〇・四〇】第三高等女學校（京都）【五〇・五〇】第三高等女學校（京都）【五一・〇〇】第三高等女學校（京都）【五一・二〇】第三高等女學校（京都）【五一・四〇】第三高等女學校（京都）【五一・五〇】第三高等女學校（京都）【五二・〇〇】第三高等女學校（京都）【五二・二〇】第三高等女學校（京都）【五二・四〇】第三高等女學校（京都）【五二・五〇】第三高等女學校（京都）【五三・〇〇】第三高等女學校（京都）【五三・二〇】第三高等女學校（京都）【五三・四〇】第三高等女學校（京都）【五三・五〇】第三高等女學校（京都）【五四・〇〇】第三高等女學校（京都）【五四・二〇】第三高等女學校（京都）【五四・四〇】第三高等女學校（京都）【五四・五〇】第三高等女學校（京都）【五五・〇〇】第三高等女學校（京都）【五五・二〇】第三高等女學校（京都）【五五・四〇】第三高等女學校（京都）【五五・五〇】第三高等女學校（京都）【五六・〇〇】第三高等女學校（京都）【五六・二〇】第三高等女學校（京都）【五六・四〇】第三高等女學校（京都）【五六・五〇】第三高等女學校（京都）【五七・〇〇】第三高等女學校（京都）【五七・二〇】第三高等女學校（京都）【五七・四〇】第三高等女學校（京都）【五七・五〇】第三高等女學校（京都）【五八・〇〇】第三高等女學校（京都）【五八・二〇】第三高等女學校（京都）【五八・四〇】第三高等女學校（京都）【五八・五〇】第三高等女學校（京都）【五九・〇〇】第三高等女學校（京都）【五九・二〇】第三高等女學校（京都）【五九・四〇】第三高等女學校（京都）【五九・五〇】第三高等女學校（京都）【六〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【六〇・二〇】第三高等女學校（京都）【六〇・四〇】第三高等女學校（京都）【六〇・五〇】第三高等女學校（京都）【六一・〇〇】第三高等女學校（京都）【六一・二〇】第三高等女學校（京都）【六一・四〇】第三高等女學校（京都）【六一・五〇】第三高等女學校（京都）【六二・〇〇】第三高等女學校（京都）【六二・二〇】第三高等女學校（京都）【六二・四〇】第三高等女學校（京都）【六二・五〇】第三高等女學校（京都）【六三・〇〇】第三高等女學校（京都）【六三・二〇】第三高等女學校（京都）【六三・四〇】第三高等女學校（京都）【六三・五〇】第三高等女學校（京都）【六四・〇〇】第三高等女學校（京都）【六四・二〇】第三高等女學校（京都）【六四・四〇】第三高等女學校（京都）【六四・五〇】第三高等女學校（京都）【六五・〇〇】第三高等女學校（京都）【六五・二〇】第三高等女學校（京都）【六五・四〇】第三高等女學校（京都）【六五・五〇】第三高等女學校（京都）【六六・〇〇】第三高等女學校（京都）【六六・二〇】第三高等女學校（京都）【六六・四〇】第三高等女學校（京都）【六六・五〇】第三高等女學校（京都）【六七・〇〇】第三高等女學校（京都）【六七・二〇】第三高等女學校（京都）【六七・四〇】第三高等女學校（京都）【六七・五〇】第三高等女學校（京都）【六八・〇〇】第三高等女學校（京都）【六八・二〇】第三高等女學校（京都）【六八・四〇】第三高等女學校（京都）【六八・五〇】第三高等女學校（京都）【六九・〇〇】第三高等女學校（京都）【六九・二〇】第三高等女學校（京都）【六九・四〇】第三高等女學校（京都）【六九・五〇】第三高等女學校（京都）【七〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【七〇・二〇】第三高等女學校（京都）【七〇・四〇】第三高等女學校（京都）【七〇・五〇】第三高等女學校（京都）【七一・〇〇】第三高等女學校（京都）【七一・二〇】第三高等女學校（京都）【七一・四〇】第三高等女學校（京都）【七一・五〇】第三高等女學校（京都）【七二・〇〇】第三高等女學校（京都）【七二・二〇】第三高等女學校（京都）【七二・四〇】第三高等女學校（京都）【七二・五〇】第三高等女學校（京都）【七三・〇〇】第三高等女學校（京都）【七三・二〇】第三高等女學校（京都）【七三・四〇】第三高等女學校（京都）【七三・五〇】第三高等女學校（京都）【七四・〇〇】第三高等女學校（京都）【七四・二〇】第三高等女學校（京都）【七四・四〇】第三高等女學校（京都）【七四・五〇】第三高等女學校（京都）【七五・〇〇】第三高等女學校（京都）【七五・二〇】第三高等女學校（京都）【七五・四〇】第三高等女學校（京都）【七五・五〇】第三高等女學校（京都）【七六・〇〇】第三高等女學校（京都）【七六・二〇】第三高等女學校（京都）【七六・四〇】第三高等女學校（京都）【七六・五〇】第三高等女學校（京都）【七七・〇〇】第三高等女學校（京都）【七七・二〇】第三高等女學校（京都）【七七・四〇】第三高等女學校（京都）【七七・五〇】第三高等女學校（京都）【七八・〇〇】第三高等女學校（京都）【七八・二〇】第三高等女學校（京都）【七八・四〇】第三高等女學校（京都）【七八・五〇】第三高等女學校（京都）【七九・〇〇】第三高等女學校（京都）【七九・二〇】第三高等女學校（京都）【七九・四〇】第三高等女學校（京都）【七九・五〇】第三高等女學校（京都）【八〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【八〇・二〇】第三高等女學校（京都）【八〇・四〇】第三高等女學校（京都）【八〇・五〇】第三高等女學校（京都）【八一・〇〇】第三高等女學校（京都）【八一・二〇】第三高等女學校（京都）【八一・四〇】第三高等女學校（京都）【八一・五〇】第三高等女學校（京都）【八二・〇〇】第三高等女學校（京都）【八二・二〇】第三高等女學校（京都）【八二・四〇】第三高等女學校（京都）【八二・五〇】第三高等女學校（京都）【八三・〇〇】第三高等女學校（京都）【八三・二〇】第三高等女學校（京都）【八三・四〇】第三高等女學校（京都）【八三・五〇】第三高等女學校（京都）【八四・〇〇】第三高等女學校（京都）【八四・二〇】第三高等女學校（京都）【八四・四〇】第三高等女學校（京都）【八四・五〇】第三高等女學校（京都）【八五・〇〇】第三高等女學校（京都）【八五・二〇】第三高等女學校（京都）【八五・四〇】第三高等女學校（京都）【八五・五〇】第三高等女學校（京都）【八六・〇〇】第三高等女學校（京都）【八六・二〇】第三高等女學校（京都）【八六・四〇】第三高等女學校（京都）【八六・五〇】第三高等女學校（京都）【八七・〇〇】第三高等女學校（京都）【八七・二〇】第三高等女學校（京都）【八七・四〇】第三高等女學校（京都）【八七・五〇】第三高等女學校（京都）【八八・〇〇】第三高等女學校（京都）【八八・二〇】第三高等女學校（京都）【八八・四〇】第三高等女學校（京都）【八八・五〇】第三高等女學校（京都）【八九・〇〇】第三高等女學校（京都）【八九・二〇】第三高等女學校（京都）【八九・四〇】第三高等女學校（京都）【八九・五〇】第三高等女學校（京都）【九〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【九〇・二〇】第三高等女學校（京都）【九〇・四〇】第三高等女學校（京都）【九〇・五〇】第三高等女學校（京都）【九一・〇〇】第三高等女學校（京都）【九一・二〇】第三高等女學校（京都）【九一・四〇】第三高等女學校（京都）【九一・五〇】第三高等女學校（京都）【九二・〇〇】第三高等女學校（京都）【九二・二〇】第三高等女學校（京都）【九二・四〇】第三高等女學校（京都）【九二・五〇】第三高等女學校（京都）【九三・〇〇】第三高等女學校（京都）【九三・二〇】第三高等女學校（京都）【九三・四〇】第三高等女學校（京都）【九三・五〇】第三高等女學校（京都）【九四・〇〇】第三高等女學校（京都）【九四・二〇】第三高等女學校（京都）【九四・四〇】第三高等女學校（京都）【九四・五〇】第三高等女學校（京都）【九五・〇〇】第三高等女學校（京都）【九五・二〇】第三高等女學校（京都）【九五・四〇】第三高等女學校（京都）【九五・五〇】第三高等女學校（京都）【九六・〇〇】第三高等女學校（京都）【九六・二〇】第三高等女學校（京都）【九六・四〇】第三高等女學校（京都）【九六・五〇】第三高等女學校（京都）【九七・〇〇】第三高等女學校（京都）【九七・二〇】第三高等女學校（京都）【九七・四〇】第三高等女學校（京都）【九七・五〇】第三高等女學校（京都）【九八・〇〇】第三高等女學校（京都）【九八・二〇】第三高等女學校（京都）【九八・四〇】第三高等女學校（京都）【九八・五〇】第三高等女學校（京都）【九九・〇〇】第三高等女學校（京都）【九九・二〇】第三高等女學校（京都）【九九・四〇】第三高等女學校（京都）【九九・五〇】第三高等女學校（京都）【一〇〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【一〇〇・二〇】第三高等女學校（京都）【一〇〇・四〇】第三高等女學校（京都）【一〇〇・五〇】第三高等女學校（京都）【一〇一・〇〇】第三高等女學校（京都）【一〇一・二〇】第三高等女學校（京都）【一〇一・四〇】第三高等女學校（京都）【一〇一・五〇】第三高等女學校（京都）【一〇二・〇〇】第三高等女學校（京都）【一〇二・二〇】第三高等女學校（京都）【一〇二・四〇】第三高等女學校（京都）【一〇二・五〇】第三高等女學校（京都）【一〇三・〇〇】第三高等女學校（京都）【一〇三・二〇】第三高等女學校（京都）【一〇三・四〇】第三高等女學校（京都）【一〇三・五〇】第三高等女學校（京都）【一〇四・〇〇】第三高等女學校（京都）【一〇四・二〇】第三高等女學校（京都）【一〇四・四〇】第三高等女學校（京都）【一〇四・五〇】第三高等女學校（京都）【一〇五・〇〇】第三高等女學校（京都）【一〇五・二〇】第三高等女學校（京都）【一〇五・四〇】第三高等女學校（京都）【一〇五・五〇】第三高等女學校（京都）【一〇六・〇〇】第三高等女學校（京都）【一〇六・二〇】第三高等女學校（京都）【一〇六・四〇】第三高等女學校（京都）【一〇六・五〇】第三高等女學校（京都）【一〇七・〇〇】第三高等女學校（京都）【一〇七・二〇】第三高等女學校（京都）【一〇七・四〇】第三高等女學校（京都）【一〇七・五〇】第三高等女學校（京都）【一〇八・〇〇】第三高等女學校（京都）【一〇八・二〇】第三高等女學校（京都）【一〇八・四〇】第三高等女學校（京都）【一〇八・五〇】第三高等女學校（京都）【一〇九・〇〇】第三高等女學校（京都）【一〇九・二〇】第三高等女學校（京都）【一〇九・四〇】第三高等女學校（京都）【一〇九・五〇】第三高等女學校（京都）【一一〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【一一〇・二〇】第三高等女學校（京都）【一一〇・四〇】第三高等女學校（京都）【一一〇・五〇】第三高等女學校（京都）【一一一・〇〇】第三高等女學校（京都）【一一一・二〇】第三高等女學校（京都）【一一一・四〇】第三高等女學校（京都）【一一一・五〇】第三高等女學校（京都）【一一二・〇〇】第三高等女學校（京都）【一一二・二〇】第三高等女學校（京都）【一一二・四〇】第三高等女學校（京都）【一一二・五〇】第三高等女學校（京都）【一一三・〇〇】第三高等女學校（京都）【一一三・二〇】第三高等女學校（京都）【一一三・四〇】第三高等女學校（京都）【一一三・五〇】第三高等女學校（京都）【一一四・〇〇】第三高等女學校（京都）【一一四・二〇】第三高等女學校（京都）【一一四・四〇】第三高等女學校（京都）【一一四・五〇】第三高等女學校（京都）【一一五・〇〇】第三高等女學校（京都）【一一五・二〇】第三高等女學校（京都）【一一五・四〇】第三高等女學校（京都）【一一五・五〇】第三高等女學校（京都）【一一六・〇〇】第三高等女學校（京都）【一一六・二〇】第三高等女學校（京都）【一一六・四〇】第三高等女學校（京都）【一一六・五〇】第三高等女學校（京都）【一一七・〇〇】第三高等女學校（京都）【一一七・二〇】第三高等女學校（京都）【一一七・四〇】第三高等女學校（京都）【一一七・五〇】第三高等女學校（京都）【一一八・〇〇】第三高等女學校（京都）【一一八・二〇】第三高等女學校（京都）【一一八・四〇】第三高等女學校（京都）【一一八・五〇】第三高等女學校（京都）【一一九・〇〇】第三高等女學校（京都）【一一九・二〇】第三高等女學校（京都）【一一九・四〇】第三高等女學校（京都）【一一九・五〇】第三高等女學校（京都）【一二〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【一二〇・二〇】第三高等女學校（京都）【一二〇・四〇】第三高等女學校（京都）【一二〇・五〇】第三高等女學校（京都）【一二一・〇〇】第三高等女學校（京都）【一二一・二〇】第三高等女學校（京都）【一二一・四〇】第三高等女學校（京都）【一二一・五〇】第三高等女學校（京都）【一二二・〇〇】第三高等女學校（京都）【一二二・二〇】第三高等女學校（京都）【一二二・四〇】第三高等女學校（京都）【一二二・五〇】第三高等女學校（京都）【一二三・〇〇】第三高等女學校（京都）【一二三・二〇】第三高等女學校（京都）【一二三・四〇】第三高等女學校（京都）【一二三・五〇】第三高等女學校（京都）【一二四・〇〇】第三高等女學校（京都）【一二四・二〇】第三高等女學校（京都）【一二四・四〇】第三高等女學校（京都）【一二四・五〇】第三高等女學校（京都）【一二五・〇〇】第三高等女學校（京都）【一二五・二〇】第三高等女學校（京都）【一二五・四〇】第三高等女學校（京都）【一二五・五〇】第三高等女學校（京都）【一二六・〇〇】第三高等女學校（京都）【一二六・二〇】第三高等女學校（京都）【一二六・四〇】第三高等女學校（京都）【一二六・五〇】第三高等女學校（京都）【一二七・〇〇】第三高等女學校（京都）【一二七・二〇】第三高等女學校（京都）【一二七・四〇】第三高等女學校（京都）【一二七・五〇】第三高等女學校（京都）【一二八・〇〇】第三高等女學校（京都）【一二八・二〇】第三高等女學校（京都）【一二八・四〇】第三高等女學校（京都）【一二八・五〇】第三高等女學校（京都）【一二九・〇〇】第三高等女學校（京都）【一二九・二〇】第三高等女學校（京都）【一二九・四〇】第三高等女學校（京都）【一二九・五〇】第三高等女學校（京都）【一三〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【一三〇・二〇】第三高等女學校（京都）【一三〇・四〇】第三高等女學校（京都）【一三〇・五〇】第三高等女學校（京都）【一三一・〇〇】第三高等女學校（京都）【一三一・二〇】第三高等女學校（京都）【一三一・四〇】第三高等女學校（京都）【一三一・五〇】第三高等女學校（京都）【一三二・〇〇】第三高等女學校（京都）【一三二・二〇】第三高等女學校（京都）【一三二・四〇】第三高等女學校（京都）【一三二・五〇】第三高等女學校（京都）【一三三・〇〇】第三高等女學校（京都）【一三三・二〇】第三高等女學校（京都）【一三三・四〇】第三高等女學校（京都）【一三三・五〇】第三高等女學校（京都）【一三四・〇〇】第三高等女學校（京都）【一三四・二〇】第三高等女學校（京都）【一三四・四〇】第三高等女學校（京都）【一三四・五〇】第三高等女學校（京都）【一三五・〇〇】第三高等女學校（京都）【一三五・二〇】第三高等女學校（京都）【一三五・四〇】第三高等女學校（京都）【一三五・五〇】第三高等女學校（京都）【一三六・〇〇】第三高等女學校（京都）【一三六・二〇】第三高等女學校（京都）【一三六・四〇】第三高等女學校（京都）【一三六・五〇】第三高等女學校（京都）【一三七・〇〇】第三高等女學校（京都）【一三七・二〇】第三高等女學校（京都）【一三七・四〇】第三高等女學校（京都）【一三七・五〇】第三高等女學校（京都）【一三八・〇〇】第三高等女學校（京都）【一三八・二〇】第三高等女學校（京都）【一三八・四〇】第三高等女學校（京都）【一三八・五〇】第三高等女學校（京都）【一三九・〇〇】第三高等女學校（京都）【一三九・二〇】第三高等女學校（京都）【一三九・四〇】第三高等女學校（京都）【一三九・五〇】第三高等女學校（京都）【一四〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【一四〇・二〇】第三高等女學校（京都）【一四〇・四〇】第三高等女學校（京都）【一四〇・五〇】第三高等女學校（京都）【一四一・〇〇】第三高等女學校（京都）【一四一・二〇】第三高等女學校（京都）【一四一・四〇】第三高等女學校（京都）【一四一・五〇】第三高等女學校（京都）【一四二・〇〇】第三高等女學校（京都）【一四二・二〇】第三高等女學校（京都）【一四二・四〇】第三高等女學校（京都）【一四二・五〇】第三高等女學校（京都）【一四三・〇〇】第三高等女學校（京都）【一四三・二〇】第三高等女學校（京都）【一四三・四〇】第三高等女學校（京都）【一四三・五〇】第三高等女學校（京都）【一四四・〇〇】第三高等女學校（京都）【一四四・二〇】第三高等女學校（京都）【一四四・四〇】第三高等女學校（京都）【一四四・五〇】第三高等女學校（京都）【一四五・〇〇】第三高等女學校（京都）【一四五・二〇】第三高等女學校（京都）【一四五・四〇】第三高等女學校（京都）【一四五・五〇】第三高等女學校（京都）【一四六・〇〇】第三高等女學校（京都）【一四六・二〇】第三高等女學校（京都）【一四六・四〇】第三高等女學校（京都）【一四六・五〇】第三高等女學校（京都）【一四七・〇〇】第三高等女學校（京都）【一四七・二〇】第三高等女學校（京都）【一四七・四〇】第三高等女學校（京都）【一四七・五〇】第三高等女學校（京都）【一四八・〇〇】第三高等女學校（京都）【一四八・二〇】第三高等女學校（京都）【一四八・四〇】第三高等女學校（京都）【一四八・五〇】第三高等女學校（京都）【一四九・〇〇】第三高等女學校（京都）【一四九・二〇】第三高等女學校（京都）【一四九・四〇】第三高等女學校（京都）【一四九・五〇】第三高等女學校（京都）【一五〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【一五〇・二〇】第三高等女學校（京都）【一五〇・四〇】第三高等女學校（京都）【一五〇・五〇】第三高等女學校（京都）【一五一・〇〇】第三高等女學校（京都）【一五一・二〇】第三高等女學校（京都）【一五一・四〇】第三高等女學校（京都）【一五一・五〇】第三高等女學校（京都）【一五二・〇〇】第三高等女學校（京都）【一五二・二〇】第三高等女學校（京都）【一五二・四〇】第三高等女學校（京都）【一五二・五〇】第三高等女學校（京都）【一五三・〇〇】第三高等女學校（京都）【一五三・二〇】第三高等女學校（京都）【一五三・四〇】第三高等女學校（京都）【一五三・五〇】第三高等女學校（京都）【一五四・〇〇】第三高等女學校（京都）【一五四・二〇】第三高等女學校（京都）【一五四・四〇】第三高等女學校（京都）【一五四・五〇】第三高等女學校（京都）【一五五・〇〇】第三高等女學校（京都）【一五五・二〇】第三高等女學校（京都）【一五五・四〇】第三高等女學校（京都）【一五五・五〇】第三高等女學校（京都）【一五六・〇〇】第三高等女學校（京都）【一五六・二〇】第三高等女學校（京都）【一五六・四〇】第三高等女學校（京都）【一五六・五〇】第三高等女學校（京都）【一五七・〇〇】第三高等女學校（京都）【一五七・二〇】第三高等女學校（京都）【一五七・四〇】第三高等女學校（京都）【一五七・五〇】第三高等女學校（京都）【一五八・〇〇】第三高等女學校（京都）【一五八・二〇】第三高等女學校（京都）【一五八・四〇】第三高等女學校（京都）【一五八・五〇】第三高等女學校（京都）【一五九・〇〇】第三高等女學校（京都）【一五九・二〇】第三高等女學校（京都）【一五九・四〇】第三高等女學校（京都）【一五九・五〇】第三高等女學校（京都）【一六〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【一六〇・二〇】第三高等女學校（京都）【一六〇・四〇】第三高等女學校（京都）【一六〇・五〇】第三高等女學校（京都）【一六一・〇〇】第三高等女學校（京都）【一六一・二〇】第三高等女學校（京都）【一六一・四〇】第三高等女學校（京都）【一六一・五〇】第三高等女學校（京都）【一六二・〇〇】第三高等女學校（京都）【一六二・二〇】第三高等女學校（京都）【一六二・四〇】第三高等女學校（京都）【一六二・五〇】第三高等女學校（京都）【一六三・〇〇】第三高等女學校（京都）【一六三・二〇】第三高等女學校（京都）【一六三・四〇】第三高等女學校（京都）【一六三・五〇】第三高等女學校（京都）【一六四・〇〇】第三高等女學校（京都）【一六四・二〇】第三高等女學校（京都）【一六四・四〇】第三高等女學校（京都）【一六四・五〇】第三高等女學校（京都）【一六五・〇〇】第三高等女學校（京都）【一六五・二〇】第三高等女學校（京都）【一六五・四〇】第三高等女學校（京都）【一六五・五〇】第三高等女學校（京都）【一六六・〇〇】第三高等女學校（京都）【一六六・二〇】第三高等女學校（京都）【一六六・四〇】第三高等女學校（京都）【一六六・五〇】第三高等女學校（京都）【一六七・〇〇】第三高等女學校（京都）【一六七・二〇】第三高等女學校（京都）【一六七・四〇】第三高等女學校（京都）【一六七・五〇】第三高等女學校（京都）【一六八・〇〇】第三高等女學校（京都）【一六八・二〇】第三高等女學校（京都）【一六八・四〇】第三高等女學校（京都）【一六八・五〇】第三高等女學校（京都）【一六九・〇〇】第三高等女學校（京都）【一六九・二〇】第三高等女學校（京都）【一六九・四〇】第三高等女學校（京都）【一六九・五〇】第三高等女學校（京都）【一七〇・〇〇】第三高等女學校（京都）【一七〇・二〇】第三高等女學校（京都）【一七〇・四〇】第三高等女學校（京都）【一七〇・五〇】第三高等女學校（京都）【一七一・〇〇】第三高等女學校（京都）【一七一・二〇】第三高等女學校（京都）【一七一・四〇】第三高等女學校（京都）【一七一・五〇】第三高等女學校（京都）【一七二・〇〇】第三高等女學校（京都）【一七二・二〇】第三高等女學校（京都）【一七二・四〇】第三高等女學校（京都）【一七二・五〇】第三高等女學校（京都）【一七三・〇〇】第三高等女學校（京都）【一七三・二〇】第三高等女學校（京都）【一七三・四〇】第三高等女學校（京都）【一七三・五〇】第三高等女學校（京都）【一七四・〇〇】第三高等女學校（京都）【一七四・二〇】第三高等女學校（京都）【一七四・四〇】第三高等女學校（京都）【一七四・五〇】第三高等女學校（京都）【一七五・〇〇】第三高等女學校（京都）【一七五・二〇】第三高等女學校（京都）【一七五・四〇】第三高等女學校（京都）【一七五・五〇】第三高等女學校（京都）【一七六・〇〇】第三高等女學校（京都）【一七六・二〇】第三高等女學校（京都）【一七六・四〇】第三高等女學校（京都）【一七六・五〇】第三高等女學校（京都）【一七七・〇〇】第三高等女學校（京都）【一七七・二〇】第三高等女學校（京都）【一七七・四〇】第三高等女學校（京都）【一七七・五〇】第三高等女學校（京都）【一七八・〇〇】第三高等女學校（京都）【一七八・二〇】第三高等女學校（京都）【一七八・四〇】第三高等女學校（京都）【一七八・五〇】第三高等女學校（京都）【一七九・〇〇】第三高等女學校（京都）【一七九・二〇】第三高等女學校（京都）【一

春の流行帽

シンクな春の裏子をつけ、やよいさんしたボウンドのスター

若草踏んでハイキング

氣の合つた同志か、家族連れ

これが先つ第一の條件です

服裝旅程などの注意

(ハイキングで一番能使する足には携帯品はメンバーの體力に應じて分擔しますが、出來るだけ無駄なものを省くことが大切です。そして荷物はその先で買求めるので、まつ水筒、飯盒、地圖、懷中電燈、雨具、帽子、タオル、手拭、ハンカチ、ポケットナイフ等で充分間に合ひます。一番注意しなければならないことは、體に無理にならない程度で、しかも參加者の全部が愉快に全コースを終了出來るやうなプランを作ることです

(ハイキングで一番能使する足には特に細心の注意を拂ひます。よく足に慣れたもので八先の固いコードリした編み靴がよく、帽子は日光や雨を防ぐために絹製を充分被り込んで皮を柔かくしておきます。出發後は絶對に脱らさないやうに紐をつけます。靴下は體段して新しい靴下に重ねて二枚穿くのがいい方法です。そして、休憩時には靴の靴を脱いで休ませるやうにしたいものです

(ハイキングといふ言葉は英國のHikeから來たもので〝仲よく腕りながら歩く〟といふ意味です。つまり心身を鍛練しながら樂しむ目的でテントを擔いだり、リュックサックを背負つたりして出來る限り足を使つて旅行する事です。(ドイツでは大體これ同じものにワンダーフォーゲルといふのがあります)

★……ハイキングの資を一日數は自由にめいめいわけですが、家族連れには日歸りが適はしく、普通一般は家族連れは別として、氣の合つた友達——これが最も大切な條件

——五六人までが適當で、多くてもハイキングの氣分をブチこはさないやうに纏めてしまふやうな事には決して結に出掛けないことが大切です。目的は日歸りなら往復五時間二時間位かよく、一泊なら一日、二泊なら一日半、三泊四五時間といふところでせう

★……服裝は出來るだけ體裁なもので無駄もなく、又動き易い地味はできるだけ避けたいものです

……★……最良のスポンには靴下がポンプには靴下が必要です。靴下は日光や雨を防ぐために絹の廣い古ソフトなど紳情です。シャツは汗をかきますから交換を用意しておきます。そして手袋は是非一雙位は必ず手を守れないやうにしたいものです

……★……

面目一新した 吉見裁縫學園

私立學校の認可を受け 内容も充實して學則改正

永井柳太郎氏を總裁とし、帝國乳幼兒愛護聯盟を組織し、十一日麹町第一高女に於て發會式を擧げたが、今日まで既に十萬餘の乳幼兒の愛護をなして來た事は名の通りである

乳幼兒愛護聯盟の 講演と審査會

臺北地方の日程きまる

中島部長の挨拶、十一日麹町第一高女に於て愛護會の總會、十八日第二高女に於て講演會、終つて翌三日第三高女で乳幼兒愛護會を行ひ、十九日芝北に於ける乳幼兒の審査は左の通りである

十七日麻布第一、第三高女に於て講演、十八日第二高女に於て講演會、終つて翌三日第三高女で乳幼兒愛護會を行ひ、十九日芝北に於ける乳幼兒の審査は左の通りである

「理論を基本に實際を」をモットーとする吉見まつ子女史のファッション學校は、昭和四年八月、和洋裁成科、二年、四年洋裁速成科、各六ヶ月、研究科、一ヶ年、高等科、一ヶ年、この外に特に一般家庭婦人その他希望者の便宜を計つて和洋裁選成科、各六ヶ月がある、授業科目の内、必須科目は修身、公民科、和洋裁理論、實習、手藝、家事、洋裁に關する外國語、體操、音樂、國語等、その外隨意科目として國文學、英文學、フランス語、美容實習、習字、生花、茶の湯、料理、音樂等、授業は研究科一ヶ年四十二ヶ年、女學校卒業者の入學する普通科二ヶ年、高等科卒業生の爲めの研究科一ヶ年、この外に特に一般家庭婦人その他希望者の便宜を計つて和洋裁選成科

滿洲國

皇帝陛下（十五日）御退京

天皇陛下の御誘引で 御別れの御宴に臨御

盡きせぬ御名殘を惜まれ給ひ 午後二時十分宮城御退出

【東京十四日發】滿洲國皇帝陛下には愈々十五日御退京、關西地方の御巡遊に關西離宮の途に就かせらるることになつた去る六日御入京以來の我皇室の寄られて深厚なる御交誼御歡待に對する御答禮と御退京の御挨拶を述べらるべく十四日改めて宮城に御參入、天皇皇后兩陛下と御會食になつたが、天皇皇后兩陛下には朕々皇帝陛下を御見送り遊ばされ午後零時十分自動車にて赤坂離宮御出門、宮城に御入、天皇、皇后兩陛下を始め奉り皇族方、閣僚、樞密院議長、宮相、侍從長、侍從武官長、式部長官、伏見宮同妃殿下、閑院宮同妃殿下、久邇宮同妃殿下、朝香宮同妃殿下、東久邇宮同妃殿下、竹田宮同妃殿下、北白川宮同妃殿下、賀陽宮同妃殿下、李王殿下、同妃殿下、梨本宮同妃殿下、朝鮮總督、滿鐵總裁、關東長官、滿洲國大使、滿洲國參議府議長、滿洲國國務總理、滿洲國軍最高顧問、滿洲國軍參謀長、滿洲國軍政部大臣、滿洲國軍將官、滿洲國軍參謀官、滿洲國軍副官、滿洲國軍侍從武官、滿洲國軍侍從武官長、滿洲國軍侍從官、滿洲國軍侍從官長

臺灣地租規則改正
山林雜種地皆課稅
一年增收百六十萬圓

臺灣地租規則。自大正八年一部改正以來。迄今垂不改易。有背現在實情者不少。昭和四年。乃計上調金壹百四十萬圓。五年間繼續調查。已得六十七町步。仰御裁可。十四日以府報公布改正律令。其內容乃等則增張。有租地編入。整理等。初年度暫府可增收百六十萬圓。改正要點。即二、田園、養魚池、建物敷地等則租率改正。此四地目之土地。各準照新等則。新租率改則。(等則改正)

二、從來無租地之山林雜種地。照此改正。已成有租地(有租地編入)

三、臺灣地租規則所定一、運動場及保甲壯丁團用地則爲無租地。

二、忠魂碑。紀念碑及類此敷地。

三、水道川地(水源地、貯水池、濾水場。卸水場及水道線路所要土地)及公共井敷地。

四、農業場。墓埜。燒却場。臥屍埋却場。共同便所及尿尿糞菌地敷地。

五、警鐘臺及火藥庫敷地

地目整理

近時神社增多。將來亦有奬設之要。乃由祠廟敷地分離。新設神社敷地。又從來有河川地目。茲與湖及海同樣。不算爲地目。而等則視其收益狀況。或昇或降。

三、臺灣地租規則所定一、十五種目之土地地目中(一)由祠廟敷地分離。新設神社敷地。(二)無河川之地目(地目整理。改正趣旨

等則改訂。從來地租乃值田園、養魚池、建物敷地賦課料多寡以定等則。今則山林雜種地亦課稅。改正前田園各十七則。建物敷地十一則。照土地性質及位置。超過定數。欲銓衡二十餘名。同日午前九時。飛抵加禮灣。翌日午後六時。在昭和官邸。開東部官民招待會。而兩機於十五日遊覽飛行。翌日午前八時。赴臺東遊覽飛行。午後二時。歸花蓮港。十八日午前八時半抵台灣。同八時半出發。同午後零時二十分。歸還臺北。而飛到花蓮港時。有政所廳長。宮崎街長養魚池十一則。建物敷地十七則。今改爲田園各二十則。養魚池十則。建物敷地十二則。今改爲田園各十七則。照土地性質及位置。超過定數。欲銓衡二十餘名。同日午前九時。飛抵加禮灣。翌日午後六時。在昭和官邸。開東部官民招待會。而兩機於十五日遊覽飛行。翌日午前八時。赴臺東遊覽飛行。午後二時。歸花蓮港。十八日午前八時半出發。同午後零時二十分。歸還臺北。而飛到花蓮港時。有政所廳長。宮崎街長

義勇兩號機訪東部
十五日朝發臺北
花蓮港遊覽飛行廿餘名

愛國專賣。翠校兩號機。專賣局支局長其他諸人。爺都市。花蓮港廳訪發會支部。募集搭乘遊覽飛行者。得希望者百餘名。因

臺中州市郡
視學會議
臺中州市郡視學會議。訂

臺中州市郡視學會議。訂於州廳會議室。諮問事項如左。記日程。一、昭和十年度教育上重要施設事項。二、關于社會事業各般。本年度。特別奬勵事項如何。三、公民教育。政治教育所關之件云。

新莊郡管內
清潔日程

新莊郡警察課管內。決定依左記日程。施行春季大清潔。但雨天順延。十七日新莊街。直轄一圓。自十八日至二十日頭前派出所。座之林百貨店食堂。呼洋酒未至。遽即閉下悛改。十九日至二十二日二重埔派出所管內。自十七至二十日蘆洲派出所管內。自十七日至二十日頭前派出所管內。自十八日至二十一日山腳派出所管內。自十七日至二十日下福派出所管內。自十八日至二十一日樹林口派出所管內自十七日至二十日下福派出所管內。自十九日至二十二日二重埔派出所管內。自十九日至二十二日三重埔派出所管內。自十七至二十日和尚洲派出所管內。自十七日至二十日更寮派出所管內。自十七日至二十日成子寮派出所管內。

臺中州市郡
視學會議
臺中州市郡視學會議。訂

臺中州市郡視學會議。訂於州廳會議室。諮問事項如左。一、昭和十年度教育上重要施設事項。二、關于社會事業各般。本年度。特別奬勵事項如何。三、公民教育。政治教育所關之件云。

滿洲國皇帝陛下
晉宮告別兩陛下
豐明殿御餞送

東京十四日電。滿洲國皇帝陛下。訂十五日還京。旅行關西地方。而後啓歸國。十四日。再入宮城。與天皇皇后兩陛下。御會見。天皇皇后兩陛下。御爲主賓。相與宴飲。皇帝陛下。先謝我皇室御厚遇。次敍禮告別各皇族殿下。同二時十分。爲天皇皇后兩陛下所送。還出宮城。歸赤坂離宮云。

聖駕親臨
離宮答禮
東京十四日電。天皇陛下

因滿洲國皇帝陛下。敍退京告別之禮。十四日午後二時。三十分。以自動車略式還御。還出宮城。幸赤坂離宮。答禮。同午後三時。三十分。以自動車略式還御。還出宮城。幸赤坂離宮。答禮。

公使報告中國近況
上海排日決議尚未取消
西南反日尚濃

東京十四日電。對華新政策確立。且與重要指對之全華總領事會議。各總領事。各有所報告如左。

一、各地排日現況

一、西南地方。與南京政府。政治的對立。亦有關係。反日傾向。仍然濃厚。

一、上海等處。市總商會及各同業組合。滿洲事變直後排日決議。尚未取消。又日本貨物交易亦未十分回復。但日本貨物之銷售。中國經濟界一般的疲弊。亦有影響。

一、長江沿岸。天津。及福建地方。對日態度。漸次改善。不如滿洲事變直後。不與日本通商折衝。

一、上海等處。市總商會及各同業組合。滿洲事變直後排日決議。尚未取消。又日本貨物交易亦未十分回復。但日本國不禁膨脹。銀輸出。卽不行管理通貨政策。決行健全通貨政策。如平衡稅。施壓之銀輸出稅。整課二十乃至二十五。以國際銀本位。不行管理通貨政策。決

中銀宋子文氏
求外銀支援
通貨政策

上海十三日電。中國銀價奔騰。貨幣對策。不得不爲更立。決定堅持宋子文氏所唱健全通貨政策之方針。但其遂行。須仰外國銀行協力。氏近來輒惡外國銀行。精神的交涉。十四日正午。招待滬濱正金其他等四組合銀行支配人訴以中國貨幣窮狀。又懇亦未十分回復。但日本貨物之銷售。中國經濟界一般的疲弊。亦有影響。

一、西南地方。與南京政府。政治的對立。亦有關係。反日傾向。仍然濃厚。

一、長江沿岸。天津。及福建地方。對日態度。漸次改善。不如滿洲事變直後。不與日本通商折衝。

一、上海等處。市總商會及各同業組合。滿洲事變直後排日決議。尚未取消。又日本貨物交易亦未十分回復。但日本國不禁膨脹。銀輸出。卽不行管理通貨政策。決

南軍司令官
訓示軍人
國體觀念

新京十四日發電通。南關東軍司令官。鑒之日本國體觀念。皇帝陛下。御會見。握手爲禮。同二時五十分。爲皇帝陛下所送。還幸宮城云。

南崁組合總會

桃園郡廳管庄南崁信川勝。去十三日上午十時起。在同地五

時雨忽降
東石

東石郡下山孝水稻陰稻。現正乏水。去十日以來。雨然下雨。連日沾潤。農民正享水稻得以

臺南市林百貨店五階
鄉田市雇自殺續報
出於迷信先配鎭灶

臺南市林百貨店之五階。鄉田俊治。年四十五。供職市街土木水道營繕係。因之市葉山土木課長聞凱坂離宮。與皇帝陛下御會見。握手爲禮。同二時五十分。爲皇帝陛下所送。還幸宮城云。

南軍司令官
訓示軍人
國體觀念

新京十四日發電通。南關東軍司令官。鑒之日本國體觀念。皇帝陛下。御會見。握手爲禮。同二時五十分。爲皇帝陛下所送。還幸宮城云。

臺南專賣支局
記念奉告
表彰勤勞

專賣局臺南支局。以本年

臺博協贊會宣傳部
作成具體案大活動
廣告費以外二萬五千圓

臺灣博覽會協贊會宣傳部方面。

▲火柴(燐寸)。宣傳博覽會之火柴。製造十萬匣。

▲博覽會々場案內印刷物。百萬枚。頒與一般觀覽者。

▲海上時報。補助其紙價金。充作船中施設。

▲勞働宣傳歌及作曲盤。以懸賞金約六百圓。對全島民。募集應募及臺灣宣傳歌。充作皆音盤之曲盤。宣傳于島內。及內地

▲臺灣島嗽圓。與事務局分擔。按印刷計二萬部。現場卽死。新木被英國官憲捕去。至四月二日。判決懲役六年。顧新木作俑。若不提出榮刀勢必被殿打。故其行動乃正當防衛。該地在住日人。九分餘。乃嘱中松竹山郡守。代其交涉。結局世甲以三千二百五十圓買定。又關外亦有買收約十甲。該不久能大興工事云

臺南市林百貨店五階
鄉田市雇自殺續報
出於迷信先配鎭灶

臺南市林百貨店之五階。鄉田俊治。年四十五。供職市街土木水道營繕係。因之市葉山土木課長聞凱

樹林腦炎
小兒死亡

海山郡樹林庄下樹林。朱阿其中養蒸種六百二十九甲。陸稻三千一百十甲。計三千九百九十六甲。比之昭和九年度。減少九百九十甲。

圓通寺春祭

海山郡中和庄碧湖圓通寺。每年三月十日啟動八等。曾受表彰。去十日啟動八等。曾受表彰。數十回。而州下本島人巡查敍勳者。以吳氏爲最矢云。

島巡敍勳

郡警務課巡查吳添福氏。年屆五十。去月末日。在職滿三十箇年。爲州下唯一永年勤務者。去十日敍勳八等。曾受表彰。數十回。而州下本島人巡查敍勳者。以吳氏爲最矢云。

詩壇

矮屋　吳敏敦

三間矮屋份傾斜。修竹茂林地自偏。曉起徐行山徑曲。夜深獨坐月明天。至誠能感動。捷徑儻如神。存養依時祭。高明想日新。有恒斯足貴。無欲最堪珍。世變由人競。天機許我親。漫言無後報。細味有前因。欲去形骸累。須求哲理眞。悠悠望六合。花草正逢春。

小說
櫻花裳(下卷)
第六十三回
參觀殖產專賣

嫁與甲家。甲家之主人。名曰甲某。年已四十餘。而未有子。故欲得一女子。以爲繼嗣。而其妻則年已三十餘。而未有子。故欲得一女子。以爲繼嗣。而其妻則年已三十餘。而未有子。故欲得一女子。以爲繼嗣。

蘇澳高雄
水產日宣傳

▲蘇澳庄。去十二日水產記念日早朝。諸關係者。參拜金比羅神社。祈願豐漁平安。同九時舉供養祭。

黑姬丸船員
殺死華工

英昌憲徵役六年

三非物產。所有貨物。船黑姬丸。日前入基隆港。對港務當局。報告發生殺人事件。卽同船前月廿六日。寄港于馬來半島。載取鐵石。有中國人苦力。因船員虐待。絕飲料水之請。而毆打之。氣。及立招牌于臺北。基隆其他各處。

▲臺灣島嗽圓。與事務局分擔。按印刷計二萬部。

▲博覽會々場。案內印刷物。百萬枚。頒與一般觀覽者。

▲海上時報。補助其紙價金。充作船中施設。

▲勞働宣傳歌及作曲盤。以懸賞金約六百圓。對全島民。募集應募及臺灣宣傳歌。充作皆音盤之曲盤。宣傳于島內。及內地

臺南專賣支局
記念奉告
表彰勤勞

專賣局臺南支局。以本年

味の素

(登錄商標)

如是則味の素眞是味道中心原料之霸王、

山珍海味、鷄鴨猪羊、我等不論何人、皆是吃了、但婦人雖有調味方法、然而純正鮮美、終不能及味の素也

宮內省御用御味の素本舖　鈴木商店

滋補飲料　鳥標　牛乳　乾燥

高雄婦人科醫院　陳金定謹啓